

【実践報告】

「競技祭」を教材としたオリンピック教育の実践教育活動

—「とうがく競技祭 2014」実践報告—

“GAMES” as Educational Material of the Olympic Education
—Practical Reports of “TOGAKU GAMES 2014”—

木村華織*・黒須雅弘*・田中望*・出口順子*

Kaori KIMURA, Masahiro KUROSU, Nozomi TANAKA, Junko DEGUCHI

キーワード：オリンピック，オリンピック教育，実践教育，スタディオン走

Key Words: Olympic Games, Olympic education, practical education, “Stadion”

要約

本稿は、東海学園大学（以下、本学とする）スポーツ健康科学部に所属する学生実行委員によって企画・運営された「とうがく競技祭 2014」について報告するものである。2013年9月、2020年に開催される第32回オリンピック競技大会および第16回パラリンピック競技大会（以下、2020年東京大会とする）開催都市に東京が決定した。2014年7月には、本学も2020年東京大会組織委員会と連携協定を結んだ。IOCは、教育機関としての主要な役割は、オリンピック・パラリンピックをはじめとするスポーツを含んだ教育活動によって、オリンピック教育を推進していくことであると提案している。オリンピック教育プログラムを推進するために、本学スポーツ健康科学部では、古代オリンピックと近代オリンピックの両方の要素を含んだ実践型オリンピック教育プログラム「とうがく競技祭 2014」を実施した。本競技祭では、「古代スタディオン走」「芸術競技・ダンス」「綱引き」「リレー」の4つの競技を行った。本競技祭の成果は、企画・運営を通じて学生実行委員がオリンピック精神やオリンピックに関する歴史、文化的価値を実践的に学習することができた点にある。

Abstract

This practical report describes the learning accomplishments of students engaged in Olympic education at Tokai Gakuen University in Aichi Prefecture, Japan. In 2013, at the 125th congress of the International Olympic Committee (IOC), Tokyo was selected as the

* 東海学園大学スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科

host city for the Game of the XXXII Olympiad and the XVI Paralympic Games (the 2020 Tokyo Games). Tokai Gakuen University, referred to as TOGAKU, became one of the cooperating educational institutions for the Games. The IOC suggests that a primary role of these institutions should be to promote Olympic education through educational activities using sports and Olympic- and Paralympic-related materials. In order to promote an Olympic education program for freshmen at TOGAKU, 70 volunteer students in TOGAKU School of Sport and Health Science organized and ran the "TOGAKU GAMES 2014". TOGAKU GAMES was a sports event incorporating components of both the ancient Greek Olympics and modern athletic events. It comprised 4 athletic events as follows: "Stadion", the origin of sprint race, Dance, as an artistic event, Tug of War, and Sprint Relay. The organizing of TOGAKU GAMES was an effective educational tool, both in theory and in practice, as a result of which volunteer students learned the historical background, social values, and cultural aspects of the Olympics Games.

1. 緒言

本稿は、東海学園大学（以下、本学とする）スポーツ健康科学部が、オリンピック教育の実践教育活動として行った「とうがく競技祭 2014」（以下、競技祭とする）について報告するものである。以下に、競技祭を実施するに至った経緯とその開催意義を述べる。

2013年9月7日に開催された第125次国際オリンピック委員会（IOC）総会にて、2020年第32回オリンピック競技大会及び第16回パラリンピック競技大会（以下、2020年東京大会とする）の開催都市が東京に決定した。これに伴い、2014年6月23日には2020年東京大会組織委員会（以下、組織委員会とする）が、全国の大学・短期大学と連携協定（以下、大学連携協定とする）を締結した。本学は同年7月に組織委員会と大学連携協定を締結し、「スポーツを通じた人間教育を支援し、本学の教育理念である『共生（ともいき）』を实践する」とコメントを発表している（TOKYO 2020 ホームページ 大学連携協定締結校コメント一覧参照¹⁾）。これにより、本学においても連携大学としてオリンピック教育の推進が求められることとなった。

2020年東京大会に向けた大学連携協定では、オリンピック教育の推進が柱になっているほか、グローバル人材の育成、パラリンピックの理解促進、広報活動、イベント開催など、各大学の特性を活かした取り組み等を進めていくことが目的とされている。しかしながら、オリンピック教育に関する概念そのものが曖昧なため、日本においては教育現場での実践が進んでいるとは言い難い。2010年12月に設立されたオリンピック教育プラットフォーム（Center for Olympic Research and Education; CORE）では、オリンピック教育を「スポーツやオリンピック（パラリ

ンピック等を含む)を教材として、国際的な視野に立ち世界平和の構築に貢献する人材を育成する教育的活動²⁾と定義している。また、舂本(2012)は、オリンピック教育という用語の曖昧性を払拭するために、その守備範囲を次のように整理している。オリンピックに関する(1)知識学習(オリンピックについて学ぶ)、(2)体験学習(オリンピックを通して学ぶ)、(3)実践学習(スポーツ実践の中でオリンピズムを学び、身につける)である。オリンピック教育に関する論考において来田(2012)は、オリンピック教育を「スポーツの教育的価値を学ぶための挑戦」とし、オリンピックを学校体育で扱うことの意味を、オリンピックが「スポーツの文化的・教育的機能を通じ、人々が『人生で大切なことは何か』『そのために必要な行動とはどのようなものか』を考える機会を提供する場だからである」と述べている。

このように、オリンピックにおける教育的価値やオリンピック教育の理論的な意義は示されているものの、具体的な教育実践事例の蓄積や教材のマニュアル化が十分になされているとはいえない。オリンピック教育の実践方法については、IOCからOVEP(Olympic Value and Education Programme)のツールキット(AN OLYMPIC EDUCATION TOOLKIT)³⁾が教員や指導者向けに作成されているが、日本ではツールキットを用いた教育実践や研究報告はほとんどなされていない⁴⁾。また、国内ではCOREが拠点となってオリンピック教育に関する理論的研究と教育実践を展開しているが、高等教育機関における学部規模でのオリンピック教育の教育実践報告はなされていない。つまり、大学連携協定によって短期大学や大学に求められている教育実践には、特別にマニュアル化された形式等も存在しない。そのため、各教育機関の人材や専門分野、施設等を含んだ教育環境によって多様に展開されていくことが求められている。

そこで、本学スポーツ健康科学部では、オリンピック教育の導入教育として実践型オリンピック教育プログラムの企画・運営に取り組むことにした。具体的には、本学の学部行事として毎年行われてきた「運動会」を土台に、古代・近代オリンピック競技大会の要素を取り入れた「競技祭」にすることにより、イベントを通じたオリンピック教育を目指した。本学における「競技祭」の試みは、高等教育機関における学部規模でのオリンピック教育の教育実践としては、国内初の取り組みであると考えられる。

他方、中学校・高等学校の新学習指導要領では保健体育「体育理論」の一部に、オリンピックを題材にしながらスポーツの歴史や文化について学ぶことが明記された⁵⁾。本学部における競技祭開催の取り組みは、保健体育科教員を目指す学生たちが教育現場で活用できる教育実践モデルを提示する意味でも、その意義は大きい。

競技祭には、1年生は選手として、2年生は企画・運営者(以下、実行委員とする)としてそれぞれ参加する。両者の取り組みを舂本(2012)の示すオリンピック教育のコンセプトに当てはめた場合、1年生は「知識学習」と「体験学習」に、2年生は「体験学習」と「実践学習」に位置づけられる。

以下、本稿では、第一に競技祭全体の概要について述べ、第二に競技祭の実行委員である2年生の取り組みを中心に報告する。

2. 「とうがく競技祭2014」の概要

競技祭を企画するにあたり、担当教員4名の共通理解として「参加者が競技祭を通してオリンピックに関わる歴史や文化に触れ、スポーツやオリンピックの価値を身体活動を通じて感じることに重きを置く」ことを確認した。この共通理解のもとに、競技祭が企画・開催された。また、チーム一丸となることを目的に、選手として参加する1年生を4つの団（赤、白、青、黄）に分けて行う対抗戦方式を用いた。以下に、競技祭の目的や実施した競技プログラムについて報告する。

(1) 競技祭の目的

本競技祭の目的は、体育・スポーツ系専門学部の学生として、オリンピック精神（オリンピズム）やオリンピックの教育的価値について理解するとともに、学校およびスポーツ現場で実践できるオリンピック教育の実践モデルを経験することにある。競技祭への参加を通して、ベストを尽くすこと、チームワーク、フェアプレーの大切さなどのオリンピックの教育的価値について学ぶとともに、古代オリンピックの競技を体験することで、過去から現在まで引き継がれているオリンピック精神を肌で感じ、オリンピックに関する理解を広げることを目指した。

(2) 開催日時・場所・参加者

開催日時：2014年11月20日（木）、9時集合、9時30分開始

場 所：東海学園大学三好キャンパス 第1グラウンド

参 加 者：1年生約280名

2年生70名（実行委員）

本学部の教員及び三好キャンパスの職員約35名

<競技祭プログラム>

9:00	学生集合・点呼・キトン配布（第1グラウンド）
9:30	開会式（開会の辞、実行委員挨拶、学部長挨拶、選手宣誓、ルール説明）
10:00	古代スタディオン走（全員参加：男子12組、女子6組、教職員1組）
11:00	綱引き（各団30名：男子20名、女子10名の男女混合）
11:30	昼食休憩
12:30	芸術競技・ダンス（全員参加）
13:00	リレー（各団16名：男女8名ずつ×2レース、男女混合）
14:00	閉会式（閉会の辞、学部長講評、得点発表、葉冠授与、実行委員挨拶）
14:30	解散

(3) 競技祭に向けた事前学習（1年生を対象とした合同ゼミナール）

競技祭は、知識学習と体験学習の2つの側面から1年生に対してオリンピック教育を試みようとするものでもあった。このために、競技祭の実施前にオリンピックや競技祭に関する知識学習の場を設定した。競技祭に向けた合同ゼミナールは、競技祭直前の「基礎演習Ⅱ」の時間帯（2014年11月17日1・2限）に、競技祭担当教員が行った。そこでは、オリンピック・ムーブメントやオリンピック教育に関する基礎的な知識を提供するとともに、オリンピックを通じて学ぶ社会的問題、競技祭で実施する競技に関する説明等がなされた。実施した講義の内容は以下の通りである。

< 1年生合同ゼミナールにおける実施内容 >

1. 2020年東京オリンピック・パラリンピック大学連携協定について
2. オリンピック・ムーブメントとは
3. オリンピック教育とは
4. オリンピックを教育教材として扱うことの意味
5. オリンピックを通して学ぶ社会的問題
(人種差別・政治的問題・国民生活への影響)
6. 実践活動を通して学ぶオリンピックの教育的価値
(体験・実践教育としての競技祭の開催の説明)
7. 競技祭で実施する競技のオリンピックとの関わり
8. 競技祭の実施方法に関する説明
(古代スタディオン走、綱引き、芸術競技・ダンス、リレー)
9. 当日の諸注意

(4) 実施競技

上記(2)にあるように、競技祭は、開会式、古代スタディオン走、綱引き、芸術競技・ダンス、リレー、閉会式、以上の6つのプログラムで構成されている。実施するプログラムは、各競技のオリンピックにおける歴史的背景を踏まえ、実践を通してオリンピックの価値や教育的意義について学べるものを選んだ。以下に、開閉会式を除く4つの競技の歴史的背景を簡潔にまとめる。

1) 古代スタディオン走

古代ギリシャ時代に行われていたオリンピア競技祭において、最も初期に始まった競技である。古代では全裸で競技を行うことが義務付けられており、参加できるのは男性のみであった。競技者はスタディオンに続く通路の前で神に対し不正をしないことを誓い、スタートゲートに向かう。スタディオンに埋め込まれた大理石のスターティングブロックに足指をかけ、両手を前に出して用意の姿勢をとり、目の前のロープが地面に落ちた瞬間に出走する。ヒュスプレクス（スタート装置）はフライングを見破りやすいよう形状が工夫されており、フライングした者はその場でムチ打ちの刑に処された。古代では神の前で不正をしないこと、つまりフェアであることが競技者には求められていた。

2) 綱引き

陸上競技のひとつとして実施されていた種目であり、第2回パリ大会(1900)、第3回セントルイス大会(1904)、第4回ロンドン大会(1908)、第5回ストックホルム大会(1912)、第7回アントワープ大会(1920)で実施されている(日本オリンピック・アカデミー, 2008)。ロンドン大会では、陸上競技や綱引きなどでアメリカとイギリスの選手が激しく争い、感情的に対立する状況が生じた。これに対し、当時のペンシルバニアの主教であるエチエルバート・タルボットは「オリンピックで重要なのは、勝つことではなく、参加することである」と述べた(来田, 2012)。「参加することに意義がある」というオリンピックのモットーが誕生したきっかけのひとつが、綱引きであった。

3) 芸術競技・ダンス

古代ギリシャ・アテネにおいては、スポーツが音楽とともに重視され、美にして善になる(カロカガティア)人間の形成という理想が置かれていた。美は外見のみでなく、高潔さを具えたもので、古代ギリシャ人の目指したカロカガティアとは、身体的能力と高潔さを調和的に具現した美しい人間であったという(真田, 2011)。競技者は身体美を追求し、観客は躍動する肉体を賛美した。また、近代オリンピックにおいては、第5回ストックホルム大会(1912)以降、芸術競技、芸術展示、文化プログラムと名前を変えながら現在でも続けられている(日本オリンピック・アカデミー, 2008)。

4) リレー

リレー種目は、個人種目が競技の大半を占める陸上競技の中でも数少ないチーム種目として知られている。オリンピックにおいても注目される競技種目のひとつで、パフォーマンスをする者と観る者がともに競走することの楽しさを実感でき、チームワークの大切さを教えてくれる。また、2014年に開催された第2回夏季ユースオリンピック競技大会(南京)では、男女混合8×100mリレーが大陸混合チームで行われるなど、多彩な取り組みが可能な種目である。

(5) キトン(古代着)の着用

すべての参加者は、綱引きを除くプログラムには古代人の着ていたキトンという衣装(白色)を纏い参加した。キトンを着用する理由は、古代の雰囲気や文化を競技祭を通して肌で感じてもらいたかったからである。現在、ギリシャのパロポネソス半島にあるネメアという場所では、古代四大競技祭のひとつであったネメア競技祭が4年に一度開催されており、すべての参加者がキトンを纏い裸足で競技をしている。また、審判が黒色のキトンを纏っていたことにならない、競技祭でも実行委員は黒色のキトンを身につけることにした(写真1)。

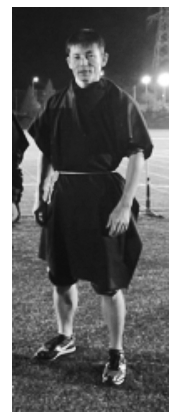


写真1. 審判用キトン

3. 競技祭実行委員の実践活動

競技祭実行委員は、競技祭を担当する4人の教員（木村華織，黒須雅弘，田中望，出口順子）のゼミナールを希望した学生と有志学生によって構成された。これらの4つのゼミナールは、2年次秋学期に開講される「専門基礎演習Ⅱ」のシラバスにおいて、競技祭の企画・運営活動を中心に取り組む演習として位置づけられている。この演習では、競技祭当日までに10週分（90分×10）の授業を展開した。また、実行委員のほとんどは、春学期に開講された「体育史」において、古代・近代オリンピックの歴史に関する講義を受講している。以降では、2年生を対象とした競技祭の準備及び競技祭当日までの実践活動について報告する。

(1) 実行委員ゼミナール設置のねらい

実行委員として競技祭に携わる2年生に対しては、実践型オリンピック教育を競技祭の企画・運営という側面から体験することによって、第一に競技祭で実施する競技のルーツ，オリンピックの価値，オリンピックにおける歴史的背景について理解を深めること，第二にスポーツ指導者として参加者の安全に配慮した環境づくり，スポーツの楽しさを体感できるプログラムづくりを実践すること，そして第三に，競技祭開催までの一連のプロセスを経る中で学生自身が思考し，彼らなりのオリンピックやスポーツの価値を見出すこと，以上の3点をねらいとした。

(2) 各ゼミナールにおける取り組み

競技祭の準備では、1つのゼミナールが1つの競技の企画・運営を行った。主な活動として、競技ルールの決定，用器具の準備，当日の運営マニュアルの作成等があげられる。この他に，全2回の全体打合せ（1回目：目的と役割の確認，2回目：各競技の進行方法・ルールの確認）及び1回のリハーサルを実施した。それ以外は，各ゼミナールで準備を進めた。競技祭当日の進行は各競技の担当ゼミナールが主導し，それ以外の実行委員はサポートに回るようにした。以下に，各ゼミナールにおける事前準備と当日の活動概要を報告する。

1) 古代スタディオン走（木村ゼミナール）

1-1) 企画・運営を行う上での課題

古代スタディオン走（以下，スタディオン走とする）は，競技祭で実施する競技の中で唯一誰も経験したことがない競技である。スタディオン走の実施にあたって課題となったのは，①ヒュスプレクスというスタート装置の製作，②280人に及ぶ選手の招集とスタート地点への誘導，順位の判定，であった。実行委員は，「体育史」の講義においてスタディオン走の実施方法は学習していたものの，ヒュスプレクスの製作方法については学んでいない。ヒュスプレクス製作に関する唯一の情報は，歴史文献に掲載されている写真と担当教員がネメア祭（ギリシャ・ネメア：2012）に参加した時に撮影した写真及びVTRのみであった。そのため製作活動は手探り状態の中で進められた。

1-2) ルールの決定・運営方法

1 レースの人数は最大 16 名とした。これはタイムスケジュールの関係からスタディオン走に関わる全行程を 30 分以内に終了することを前提にした人数かつヒュスプレクスのロープがしっかりと張れる最大の人数であった。1 レースは 1 分 30 秒で計算した。走る距離は 70m の直線コースとし、参加者に無理のない長さにすることを心がけた。走る距離が短すぎるとゴール判定が困難になり、長すぎると走ることにに対する抵抗が生まれることに配慮し決定した。

1-3) 具体的な活動内容

作業を進めるにあたり、担当教員から以下の 2 点を考慮するよう伝えた。第一に学校現場にある用器具を最大限に利用してできるだけ少ない予算で簡単に作成できること、第二に天候や寒さを考え 30 分を目標に全レースを終了させること、である。ゼミ内での活動は、ヒュスプレクス製作、招集、審判の 3 つに役割を分担して進められた。

○ヒュスプレクスの製作

写真 2 にあるように、古代スタディオン走で用いられたヒュスプレクスは、走者の前にロープが張り巡らされており、これがスタートの合図とともに地面に落ちる仕組みになっている。ネメア競技祭の写真・VTR を参考にしながら学生たち独自のヒュスプレクスが完成した（写真 3）。この作成にあたっては、材料の買出し、試作、ゼミ学生全員による組み立て作業などが繰り返された。製作過程で生じた課題として、コースを分ける木を立てること、ロープを一斉に地面に落とすこと、ロープを均一に張ることがあげられた。走行レーンはビニール紐を用いて仕切ることとした。

○招集・審判

招集係では、事前準備としてスタートリストの作成を行った。1 レース 16 名に 4 団の選手が均等にレースに入るよう、また招集時に混乱が起らないような工夫が必要とされた。これらの課題に対し、招集においては、スタート位置に対しどのような向きでどこに並べていくのか、各自の靴をどこで脱いでくるのかなど、効率の良い作業導線を設定することが求められ、これへの対応策が模索された。

審判係に課せられた課題は、ゴール判定、レーン数の決定、ゴール後の誘導であった。古代オリンピア競技祭で称賛を与えられるのは優勝者ただ一人であったが、本競技祭では 4 団に分かれた対抗戦形式を取っていることから、上位 4 着まで得点をつけることとした。また、各レースの優勝者にはオリーブのプレスレットを贈呈することとなった。困難と思われていたゴール判定は、当初目視のみで行うことを予定していたが、事前シミュレーションの結果、目視では困難であると判断し、スマートフォンのカメラ機能を用いた。

スタディオン走の運営においては、マニュアルや前例がなかったことが学生たちの自主的な活動を活発にさせ、計画、製作、実行、改善を繰り返す中で学生たちがお互いにアイデアを出し

合い、自由に思考する時間を増やしていったことがうかがえた。ヒュスプレクスの製作方法や器具の購入費等については稿を改めて紹介する。

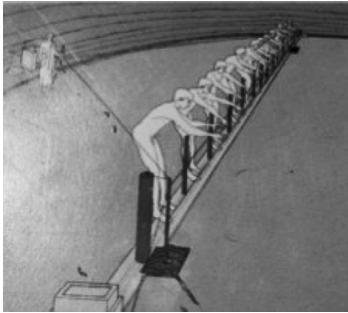


写真2：ヒュスプレクス



写真3：ヒュスプレクス（学生制作）

2) 綱引き（出口ゼミナール）

2-1) 運営方法

綱引きは誰もが幼少時に経験している競技で、単純明快なルールと競技方法であることから親しみやすいのが特徴である。その競技レベルは、運動会から競技スポーツレベルに至るまで幅広く、ルールも多様である。本競技祭においても実施にあたり、団の人数や時間を考慮してルールを決める必要があった。1年生へのルールの伝達や出場者の決定のタイミングを考慮して、最初にルール決めを行った。ルールを決めるに当たっては、試合数が多かったという昨年の学部行事「運動会」の反省を踏まえ、試合数を少なくすることを優先した。また、誰もが参加できるという観点から、対戦を男女混合チーム（男子20名、女子10名）で行い、勝敗は1回の勝負で決することとした。その代わりにトーナメントではなく総当たり戦とし、勝率が同率になった場合は再試合を行って順位を決めることとした。試合ごとに出場者を変更することもできるが、人数を守り、フェアに戦うことを伝えることを確認した。

2-2) ゼミでの活動内容

役割分担を決め、役割毎に準備を進めた。具体的には審判、記録、召集、用具、司会に分かれ、それぞれが責任を持って準備をした。審判は主にルールについて検討し、1試合1分30秒、どちらかの団が綱を自陣に2メートル引き込むか、1分30秒が過ぎた時点で長く綱を引いている団が勝ちとした。記録係は事前に対戦順を考え、対戦表の作成を行った。また当日は勝敗を管理し、順位をすみやかにつけ、本部に報告することを確認した。召集係は召集方法や誘導方法について検討した。多くの人数を一度に動かさなければならないため、目印として団旗を使用し、召集場所を明確にする工夫をした。また導線が重ならないよう、誘導方法についても何度もシミュレーションを行った。用具係は審判係、記録係、召集係から出てきた必要な用具について学内の保管場所を確認したり、ないものは購入したりという作業を行った。司会は当日のアナウンスについて原稿を作成し、円滑に競技が進められるよう考えた。すべての係りに共通して配布用のプロゲ

ラム作成の仕事があった。

2-3) 競技祭当日

競技祭当日は参加者を団別の召集場所に召集し、応援の学生を応援場所に誘導してからルールの説明を司会担当の学生が行った。召集係は人数を30名にすることに苦心していた。事前にどの試合に誰が出場するかは団毎に決めてはあったが、白熱すると勝つための工夫をそれぞれの団がするようになり、出場する人が曖昧になってしまっているようであった。召集係が中心となって声掛けを行い、参加者に公平に戦うことを意識づけると共に、環境づくりにも努めた。

3) 芸術競技・ダンス（田中望ゼミナール）

3-1) テーマの決定

芸術競技・ダンスの実施にあたっては、まず、表現の軸となるテーマの設定が必要であった。そこで、ゼミの学生に競技祭の趣旨や芸術競技・ダンスの構想を伝え、ふさわしいテーマを検討してもらった。ゼミの学生はほとんどの者がダンス未経験者であったうえ、芸術競技・ダンスについては前例がなく、明確なイメージを持つのが難しかった。模索の中での検討ではあったが、意見交換を行った結果、テーマは“躍動”に決定した。このテーマの選択から、学生はダンスに精通しているわけではなかったが、ダンスを通して「身体と心の躍動が生むエネルギー」が身体の力強さと生命力あふれる表現につながることを感覚的に捉えていたことがうかがえた。

3-2) 選曲

テーマである“躍動”の表現にふさわしく、なおかつリズムに乗って踊ることが楽しいと感じる曲を選ぶこととした。いくつかの候補曲の中から、「September」(Earth, Wind and Fire, 1978)が選ばれた。この楽曲は、ファンクミュージック(16分音符をもとに作られる16ビートが特徴)に分類される。ダンスに用いる際には、細かく速いリズムからゆっくりなリズムまでリズムの取り方を様々に変化させることが可能であり、それに伴った多様な動きを考えることができる。また、16ビートを根幹とする音楽はテンポが少しゆっくりであるため、初めてダンスを行う者でも無理なくリズムに乗ることができ、誰でも踊ることができることを目的としたリズムダンスに向いていると言える。さらに、日本でもなじみがあり、1年生も一度は聞いたことのある曲であると予想され、ダンスを踊ることへの抵抗を軽減する効果もあると考えられた。

3-3) 作品の全体構成と振付創作、役割分担

作品構成および振付は、①競技祭当日に振り付けを行う、②事前の練習時間がなくても誰でもすぐに踊ることができる、という2点を考慮した。作品構成は図1に示すように、全員で踊る部分と団別に分かれたパートとで構成することとした。この作品構成を基に、学生は赤白団担当、青黄団担当、全体担当に分かれ、それぞれが担当する部分の振付を行った。始まり方と終わり方は全員で話し合い、始まり方は時差を使ったポーズ、終わり方は全員で集合写真を撮るという構成

となった。

また、当日の進行をスムーズに行うため、音響係を1名決め、進行に合わせた音楽の対応を一任した。音響係は、メロディーやサビの部分のタイムを把握し、必要に応じて音楽をかけることができるよう準備した。

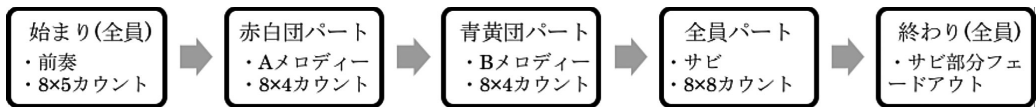


図1 作品の全体構成

3-4) 振付および作品指導

リズムダンスの振付指導は、基本的には図2のような手順にまとめられ、これを繰り返し循環させることにより一連の振付を行うことができる。

作品指導では、1年生全体の隊形が検討課題となった。当初は振付時と本番時の隊形を変える構想を練っていたが、よりシンプルで分かりやすい進行を行う必要性から、振付時と本番時は同じ隊形で行うこととなった。また、他ゼミの実行委員全員の協力を得て指導を行うことが可能となり、動きの面でのフォロー体制を整えることができた。

作品の振付指導については、当日の指導の前に①ゼミ内における相互の振付、②実行委員への振付というプロセスを経た。実際の指導となると初めはなかなかうまくいかず、失敗や反省から試行錯誤を繰り返した。しかし、実際の場所で280名余りの1年生が動くことを想定しながら活動をを進めるうちに、徐々に学生間で意見交換が行われるようになり、指導体制を構築していくことができた。

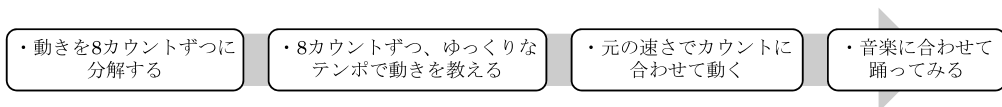


図2 リズムダンスの指導手順

3-5) 競技祭当日

芸術競技・ダンスは、午後の1番目のプログラムであったため、お昼休憩の時間から実行委員で何度か繰り返し練習することができた。また、当初は1年生がグラウンドに戻る前に練習を終了させる予定であったが、教員陣から実行委員が踊っている光景を1年生に見せることで1年生を巻き込んでいこう、とのアドバイスを受け、集合時間まで2年生は踊り続けることとした。これにより、活動の導入部分を自然と作ることができたと考えられる。

当日のダンス指導は、以下のように行った(図3)。当日は非常にスムーズに進行したため、振付に加えて踊り方や動き方のポイントなども伝えることができた。また、実行委員と1年生全員の身体がリズムに乗って弾んでいく様子、自己の身体感覚のままにエネルギーを発散させて踊る

姿は、観る者にテーマの“躍動”を感じさせた。また、動きに合わせた掛け声などが自然と出てきたことから、全員の身体と心が一体となって躍動していたことがうかがえた。

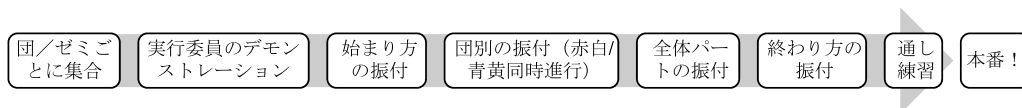


図3 当日のダンス指導の流れ



写真4. 芸術競技・ダンス“躍動”最後のポーズ!!

4) リレー (黒須ゼミナール)

4-1) リレーの魅力

リレー競技は、陸上競技の短距離種目としてほとんどの学生にとって実践的な経験があり、そのルールや競技特性に関する専門的知識については、学生間で若干の差はあるものの既知の種目である。夏季ユースオリンピック競技大会 (南京/2014) にて実施されたリレーのチーム編成とその競技ルールの独自性は前述したが、2014年5月には、第1回世界リレー選手権 (バハマ) がリレー競技の世界大会として開催される等、陸上競技の種目の中でも競技として特別な魅力がある種目と考えられる。

4-2) 競技方法と準備, ルールの決定

リレーのルール作成については、よりシンプルで競技祭当日に口頭による説明だけでも参加者が理解できる内容を重視した。競技内容とルールを作成する上での議論の中心は、高度な競技性を求めるルールにするのか、参加することの意義を優先するのかであった。今回は後者の参加性を重視し、可能な限り個人の走能力がチーム間の優劣差に影響しないルールづくりを意識した。チーム間で選手個人の走能力差が偏らない条件設定は、競走種目としては矛盾するルールではあるが、スタートする前からレース結果が予想されてしまうようなルール設定だけは避けるようにした。

そこで、次の競技方法が決定した。1チーム16人で構成し、第1走者から15走者までは100m、第16走者が200mを走る競技方法とした (表1)。このルールは、実践体験型によるオリッピッ

ク教育の実現という競技祭の実施意図を考慮したものである。

各ゼミ 8 名（女性 4 名，男性 4 名）を選出し，各団 4～5 ゼミ（16～17 名/ゼミ）で構成されているので，合計 32 名（女性 16 名，男性 16 名）でリレーチームを編成した（表 1）．当日は，1 レース 4 団が競走するレースを 2 レース実施（4 団/組）した．各チーム 16 名（女性 8 名，男性 8 名）で編成されたレースは，各々の走順配置を立案することからはじまった．同じ団であっても異なるゼミに所属する学生が前後の走者として顔を合わせることでゼミ間の交流も期待できた．

表 1. リレーのルール

走順	走行距離	走者配置	レーンの制約
第 1～第 15 走者	100m	女性，または男性	第 1～第 3 走者までセパレートレーンを走行．第 3 走者からはバトンを受け取り次第，オープンレーンを走行可能．
第 16 走者	200m	男性に限る	

競技準備にあたって唯一専門的な知識の必要性が生じたのは，スタート地点が走行するレーンによってそれぞれ異なる階段式スタートの位置設定であった．これは，陸上競技トラック種目独特のルールであり，陸上競技を専門としている学生でも熟知するのは容易ではないルールである．準備段階で走順毎に距離測定を行い，トラック表面に表示パネルを貼った（写真 5）．

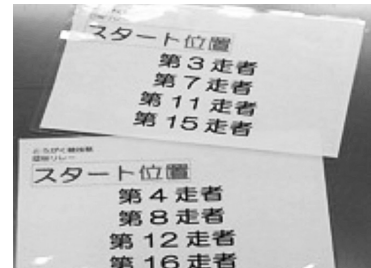


写真 5. スタート位置表示

4-3) 競技祭当日

競技祭当日は，招集場所に出場者全員を集めルール説明を行った後，実行委員が走順別に選手をスタート地点に誘導した．特に，走レーンがセパレートレーンからオープンレーンに切り替わる第 3 走者に対しては，入念にルール確認を行った．

また，このリレーには実行委員によって結成された実行委員チーム及び実行委員と教職員で編成された即席 2 チームも参加した．顔馴染みとそうでない学生たちによって構成されたチームや立場も年齢も異なる者が集まったチームがバトンをつないだ．たまたま同じチームになった者同士が 1 つのバトンをつないで競走するリレー種目の魅力を共有する時間となった．

5) 開会式・閉会式（木村ゼミナール）

5-1) 役割と課題

開閉会式担当者の役割は，式典プログラムの作成，競技祭全体の進行，式典セレモニーの準備であった．開閉会式のプログラム作成にあたっては，以下の 3 点を考慮するよう担当教員から伝えた．第一に，競技祭の趣旨を 1 年生に伝えること，第二に，古代の要素を取り入れたものにする事，第三に，自分たち（東海学園大学）独自の工夫を盛り込むこと，である．

5-2) 競技祭までの活動と成果

担当教員からの上述の投げかけに対し、学生たちは体育史の講義資料や教科書などを用いて歴史的背景について見直すことからスタートした。第一の点に対しては、開会式の実行委員挨拶に学生たちの学習の成果をみることができた。実行委員挨拶では、昨年の「運動会」から「競技祭」に変更したことの意味が、2020年東京大会の開催や1964年東京オリンピックから今年で50年を迎えることと結びつけて説明されていた。さらに、実施する4つの競技の意味や競技体験を通して学んで欲しいことが、彼らなりの言葉で説明されていた。

第二の点については、閉会式の式典において優勝チームに葉冠を授与するという取り組みが提案された。どのような葉冠を授与するのか、どのように作成するのかなど、時間をかけた議論が続いていた。ウェブ情報の収集から始まり、花屋への訪問、学内に植樹されている木々の散策、100円均一への買い出し、そして最終的にはフラワー市場へ訪問した。試行錯誤を繰り返しながら、最終的には古代オリンピック競技祭で授与されていたオリーブを用いた葉冠を作成し、授与することになった。

そして、フェアプレーや競技祭運営に協力的な姿勢で取り組んでいたチーム（団）に贈る「スマイル賞」を設けたことに、第三の課題に対する工夫が表現されていた。

6) キトンの作成

キトンは実行委員によって作成された。各ゼミナールで作成数を分担し、布をカットする作業を行った。今回準備したキトンは、1人分約2mの布地を用いた。布を2つに折りたたんで首回り部分をカットするだけの簡易的なものである（写真6, 7）。カットされた布を頭からかぶり、腰紐を締めれば衣装の着衣は完了する（写真8）。時間や予算の問題からもっとも簡易的な方法を選択したが、400人近い参加者のキトンを作成する作業は容易ではなかった。



写真6. カットした布



写真7. キトンの全体像



写真8. キトンの完成

4. オリンピック教育への期待（競技祭による教育的効果）

競技祭は、選手である1年生と実行委員である2年生が、それぞれの立場で参加するオリンピッ

ク教育の実践的取り組みであった。実行委員として競技祭の運営を行う2年生に対しては、本オリンピック教育の狭義の目的として、第一に、オリンピックの価値や教育的意義、実施競技の歴史的背景を企画・運営を通して学ぶこと、第二に、スポーツ指導者としての視点からイベントの企画・運営を経験すること、以上の2点を設定していた。また、広義においては、複合的な要素を併せ持つ競技祭の経験を通して、学生たちがスポーツやオリンピックの価値とは何か、スポーツを通じた教育とはどのようなものかを考え、ここで得た知識や経験を生かしながら学校現場やスポーツ現場における指導やオリンピック教育を展開して欲しいという期待があった。しかしこれについては、現時点で評価をすることはできないため、本節では狭義の目的としてあげた2点について、競技祭後の総括であげられた学生たちの声(表2)を用いながら、その教育的効果について考えてみたい。

先にも述べたように、スタディオン走についてはヒュスプレクス(スタート装置)の製作工程を含め実施マニュアル等は国内に存在しない。そのため体育史の授業内容をベースにしながらゼミ

表2. 競技祭実行委員を終えた学生の声

	良かった点	改善点
準備期間	<ul style="list-style-type: none"> 準備を進めるうちに、意見を言い合うことができるようになっていった。 競技祭が近づいてくると、成功させようという意識が高まった。 1年生に楽しんでもらうために、できる限りのことをしようと努力した。 1つのものを作り上げるというのは大変なことなんだと感じた。だからこそ、終わった後、達成感が得られると思うし、1つ成長できるのではないかと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> 最初から緊張感を持つ。 ハウ/レン/ソウ/カクをしっかりと行う。 中心的に動いてくれるメンバーに任せがちなになった。 他ゼミへの周知をしっかりと行う(お願いするのが直前になってしまった部分もあるため)。 古代オリンピックの種目がもう一つあってもいい。
当日指導	<p>(スタディオン走)</p> <ul style="list-style-type: none"> スタディオンという言葉やキトンを着用していたこと等も今回の競技祭を通じて知れました。ギリシャでのオリンピックがどのように行われていたかも準備期間にビデオを見ましたが、今とは違い、スタディオンもそうでしたが裸足でしていたことも知れて良かった。 スタディオン走に関しては、初めての挑戦で大変だったが、運営委員みんなで協力できて、良い経験になった。 <p>(ダンス)</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年生が元気に取り組んでくれた。 1年生、他ゼミの実行委員が協力してくれた。 召集、ダンスのレクチャー共にスムーズに進んだ。 1年生がみんな踊ることができていて、指導がしっかりできたのではないと思う。 	<p>(ダンス)</p> <ul style="list-style-type: none"> 1曲を長くする(もっとダンスしたい)。 もう少し難しいダンスでも大丈夫。 時間がオーバーすることだけでなく、時間が余った時の対応を考えておく。 後ろの方の1年生が見本が見えなかったり説明が聞こえなかったりしたので、フォローが必要である。 指令台をもう少し高く大きくしたい。(リレー) 担当をしたリレーは昨年行われた運動会にもあった種目で、それと全く同じルールでやるんじゃなくて、よりよくするためにルールを変えたり、編成を変えたり、色々大変だった。
全体を通して	<ul style="list-style-type: none"> やりがい、充実感、達成感を感じることができた。 今まで関わることの無かった人との関わりを持つことができた。 大人数に対する指導の経験ができた(声のかけ方、メリハリのつけ方など、難しかったが学ぶところがあった)。 協力してくれた他のゼミの人たちに感謝。 ゼミのメンバーが仲良くなった。 来年もダンスをやってほしい。 競技祭を通して、企画を運営することの大変さと楽しさを学ぶことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 実行委員間(ゼミ間)の連携を良くする。 他ゼミの種目の補助に対する理解が足りなかった。 1年生に対してキトンの着用の意識づけをもう少し明確に行うと良い。

内で話し合い、全員で装置の組み立て作業を行うなどの活動が繰り返し行われていた。これらを担当した学生からは、「何も分からない『ゼロ』からのスタートだったけど、皆で協力し、知恵を出し合い作り上げ、競技祭が成功したときの達成感は気持ち良かった」、「みんなの姿を見ていて、この子はこういうところに長けているんだなとか、見習いたいところだなとか、そういう部分が多く見れたことが自分の刺激になった」という意見があげられた。実施するために必要な歴史的背景を学びながら、そこに自分たちなりの工夫を加えるための意見交換や実践活動が行われる中で、お互いの他者理解が進んでいったことが読み取れる。また、「1年生に対してキトンの着用の意識づけをもう少し明確に行うと良い」という意見は、キトンを着用して競技に参加することの文化的意義を自分たちなりに見出し、1年生に理解してもらいたいという思いを持った表れであろう。

今回の競技祭においては「芸術競技・ダンス」もまた、実践事例のない初の試みであった。全員でひとつの作品を創るというプロセスの中で、「準備を進めるうちに、意見を言い合うことができるようになっていった」という変化や「1年生に楽しんでもらうために、できる限りのことをしようと努力した」という思いが芽生え、それぞれが自分なりのベストを尽くし取り組むという姿勢に繋がっていったことがうかがえた。また、「今まで関わることの無かった人と関わりを持つことができた」というコメントは、身体活動を用いた実践や身体表現が、通常の生活では関わりを持つことのない他者との関係形成に有用であることを示している。

綱引きやリレーでは、既存のルールや従来での運動会で用いられてきたルールを競技祭の趣旨や目的を踏まえたルールに変更し、限られた施設条件の中でこれまで以上に競技の魅力を発揮できるようにルールづくりが思案された。そこには、男女を分けることによって公平性を確保する競技スポーツにみられる視点からではなく、同じ場にいる個々人が共に楽しむという視点からのルールづくりがなされていた。リレーを担当した学生からは「リレーは昨年行われた運動会にもあった種目で、それとまったく同じルールで行うのではなく、より良くするためにルールを変えたり、編成を変えたり、色々大変だった」との意見があげられた。苦労はあったものの、従来の枠を越えたより良いものへと変化させようとする姿勢がみられた。また、綱引きにおいては、ルールの遵守やフェアプレーを実践するための言葉掛けが競技会当日に積極的になされていた。

本競技祭に限らず教育機関にて実施されている実習・演習で学び得ることは、参加者の性格、それまでの経験、価値観、現在の状況など個人を取り巻く環境により様々であると考えられる。そのため、個人が得るもの、感じることに相違があると考えられるが、本競技祭においては学生それぞれに実践から学び得たものがあつたことがうかがえた。通常の教科で求められる、正解を「見つける」「覚える」という学習ではなく、得た知識をどのように応用し、アウトプットしていくのかを仲間と共に思考し、表現するというプロセスが、多様な学びを学生たちにもたらすと考えられる。このことが、知識・体験・実践学習をコンセプトに据えるオリンピック教育の魅力であると本競技祭を通じて実感した。

一方で、オリンピック教育の教育的効果をどのように評価したら良いのかという新たな課題も生じた。これについては今後の検討課題としたい。

5. 結語

本稿は、高等教育機関におけるオリンピック教育の先行事例として実施した「とうがく競技祭2014」について、その概要と企画・運営を担った実行委員（2年生）の実践活動を報告するものであった。

理論と実践が融合したオリンピック教育を目指した競技祭の開催は、実行委員にとっては、これまでに得たオリンピックに関する知識を具現化し、表現する機会となった。この点では、実行委員に対し競技祭という学びの場を提供することができたといえる。また、今回の競技祭は、オリンピックに関する知識学習・体験学習・実践学習を含んだ取り組みであった。実行委員が1年生に対してキトンの着用を重視しはじめたことやフェアプレーを評価する「スマイル賞」を設けたことから、本競技祭における学習プロセスがオリンピックに関する理解だけでなく、スポーツのもつ教育的価値やスポーツ文化の理解を深めていくことに繋がったといえよう。

本競技祭の取り組みは、新学習指導要領（保健体育・体育理論）に示された「文化としてのスポーツの意義（中学校）」や「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴（高等学校）」を理解させるためのオリンピック教育実践の一助にもなると考える。

このように競技祭の開催には多くの意義を見出すことができるが、一方で課題も存在する。オリンピック教育の質的保証を考えた場合には、OVEPのツールキットに示されている事例を日本あるいは本学に適するものへと変化させ、実践するというブラッシュアップの繰り返しが必要でない。こうした取り組みが、競技祭をはじめとする本学におけるオリンピック教育をより充実したものと発展させるであろう。また、地域や学校現場を対象とした草の根レベルでのオリンピック教育を実践していくことも体育・スポーツ系専門学部を有する本学の役割といえる。

参考資料：競技祭開催までのタイムスケジュール

日程	全体スケジュール	各競技別タイムスケジュール				開催期式
		古代スタディオン走	綱引き	芸術競技	リレー	
10月6日(月)					9/29(日)第1回目標案にて、種目責任者の選出。前年度の反省もしながら、今年の目標・ルーのルールについて検討をした。	開閉式プログラム、実行委員挨拶作成
7日(火)	各競技の出場人数決定 競技祭実行委員2年生顔合わせ	スタート装置(第1回試作) ルール・組・得点の決定	ルール決め	・リズムダンスの基礎(実技) ・作品の全体構成の検討	10/6(月)12:15～ 1年生各ゼミ代表者に対して、種目責任者の学生が印刷ルーの紹介と出場者数決定依頼をした。	
8日(水)	10月中は各ゼミ内で作業を進める				10/7(火)実行委員ゼミの顔合わせ。	
9日(木)						
10日(金)						
11日(土)						
12日(日)						
10月13日(月)						
14日(火)		スタート装置(第1回試作)	10/14 役割分担決定(音楽、審判、用具、記録)	・使用曲の決定 ・各パートの振付制作と相互振付	ルー種目専念にあたって、各学生の役割分担決め、ルールの詳細について協議。	競技祭の説明文作成
15日(水)			召書:召集方法検討			
16日(木)		試作用材料買いだし	記録:対戦表を作成 用具:必要な用具の検討			
17日(金)			審判:ルールの確認と審判方法の確認			
18日(土)						
19日(日)						
20日(月)						
21日(火)		スタート装置(第2回試作)	キトン製作(1年生用) 各係で準備	・始まり方と終り方の決定 ・作品全体の流れを決定		幕習づべの検討
22日(水)						
23日(木)		試作用材料買いだし				
24日(金)						
25日(土)		スタートリスト入力完了				
26日(日)						
27日(月)						
28日(火)		スタート装置作成(グラントにて)	プログラム作成	・プログラム細案の検討 ・各パートの指導法の検討・練習	個別ルー用の細目作成作業。	
29日(水)						
30日(木)						
31日(金)						幕習用造花買いだし
11月1日(土)						
2日(日)						
3日(月)						
4日(火)	合同ゼミナール (細案の確認など)	スタート装置完成(グラントにて)	スタディオン走、ダンスの確認に参加	・音響設備の確認 ・合同ゼミナールに参加	合同ゼミ	選手宣誓の言葉作成 学部長への挨拶依頼
5日(水)	オリワ(各合同フォーラム (中京大))					
6日(木)						
7日(金)						
8日(土)						
9日(日)						
10日(月)				・指導手順についての確認		
11日(火)	全体リハーサル (グラントにて実施)	招集から審判までの流れを確認 用器員の確認・申請	リハーサル参加	・リハーサル(1年生、2年生の配置、移動、振付の手段を確認)必要	招集、及び招集後に各走組8にスタートの裏に誘導するリハーサル、必要時の確認	
12日(水)		スタート装置の材料買いだし		・プログラム細案の修正		
13日(木)		プログラム原稿締切				
14日(金)		プログラム印刷 用器員の確認				
15日(土)						
16日(日)						
17日(月)				・指導手順についての最終確認		
18日(火)	1年生合同ゼミナール (競技祭の目的・実施方法の説明)	最終調整(各部署の最終確認)	キトン(実行委員用)製作 用具確認	・キトンの制作 ・ダンス指導の練習	ルール、走行距離の確認、招集方法のシミュレーション	幕習の作成
19日(水)				・ダンスの練習 (実行委員の協力も得て)	各走組のスタート位置の確認、ルーン別にも確認測定。	
20日(木)						

競技祭当日

<注>

- 1) 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と連携協定を結んだ短期大学・大学は、連携に向けたコメントをそれぞれ発表している。東海学園大学のコメントは、TOKYO2020 ウェブページ内の「大学連携協定締結校コメント」から閲覧できる。
<https://tokyo2020.jp/jp/news/20141010daigakurenkeicoment.pdf> (2014年12月6日現在)
- 2) オリンピック教育プラットフォーム (CORE) は、2010年12月に設立された日本で唯一のIOC認定オリンピック研究センターである。筑波大学を拠点に11の附属学校と連携して、オリンピック教育に関する理論的研究と教育実践を推進している。<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/> (2014年12月6日現在)
- 3) OVEP (Olympic Value and Education Program) ツールキット「AN OLYMPIC EDUCATION TOOLKIT」は、以下のURLよりダウンロードできる。http://www.olympic.org/Documents/OVEP_Toolkit/OVEP_Toolkit_en.pdf (2014年12月6日現在)
- 4) COREが発行している“Journal of Olympic Education”のVol.1 04/2012-03/2013 及び Vol.02 04/2013-03/2014 には、筑波大学の附属校と連携して行った教育実践報告が掲載されている。それらの実践は、附属高等学校・中学校・視覚特別支援学校・聴覚特別支援学校・大塚特別支援学校などで行われたものである。
- 5) 新学習指導要領のうち中学校保健体育 (平成20年度改定)「H 体育理論」では、「3. 文化としてのスポーツの意義」の中に、高等学校保健体育 (平成21年度改定)「H 体育理論」では、「1. スポーツ文化の歴史、文化特性や現代のスポーツの特徴」の中にオリンピックに関する内容が明記された。

<文献>

- 真田 久 (2011) ギリシャ・ローマの体育・スポーツとオリンピア競技祭, 木村吉次編著「体育・スポーツ史概説」, 市村出版.
- 日本オリンピック・アカデミー (2008) オリンピック事典, 楽.
- 舛本直文 (2012) 体育科教育, 「オリンピック教育」の今日的課題, 7月号: 14-17.
- 來田享子 (2012) 体育科教育, ロンドンオリンピックがもつ教育的価値, 7月号: 10-13.